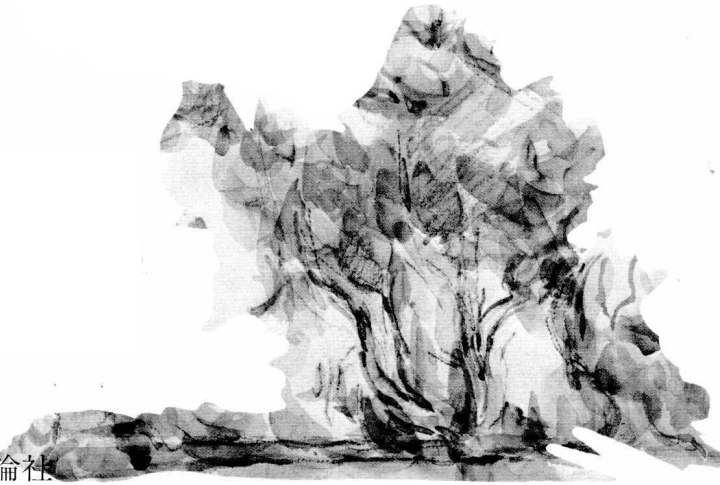
感傷夫人

伊藤 整



中央公論社

感傷夫人
新装版
©一九七二年 検印廃止
定価五八〇円
昭和四十七年十一月三十日初版
昭和四十八年一月二十日再版
著者 伊藤整
発行者 山越豊
印刷 三晃印刷
発行所 中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話(五六一)五九二一(代)

感傷夫人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

秋山豐は、朽葉色の地に、太目の紐を卷いたフェルトの登山帽をかぶつて、日だまりの坂をのぼつて行つた。十二月の半ばすぎの、風のない、晴れた午後で、オーヴァーを着てゐるのが、暑いくらゐに感じられた。

そこは東京の西南部の郊外の丘陵地帶の靜かな住宅地であつた。赤土のむき出しになつた崖の途中に、大きな欅の木が、葉を半ば以上落して、箒を逆さにしたやうに枝をひろげて立つてゐた。その欅の枝を通して、とがつた形の破風を持つた、少し古風な家が、その崖の上に立つてゐるのが見えた。藤崎三郎の柩をのせた靈柩車が、この坂を下つて行き、目を泣きはらした妻の妙子が喪服を着、子供を抱いて、その後に續く車に乘るのを見たのは、ほんのこの間のことだつたやうな氣がする。それが今日で一年たつたのだ。

その葬式の一週間後に、秋山豐は、未亡人の妙子から故人の形見として何か希望のものはないかとたづねられた。秋山が藤崎三郎の登山帽のことを口にすると、妙子は、少し困つたやうな顏をした。妙子はその帽子を人にやりたくなかつたらしい。秋山は言ひ出さねばよかつた、と思つた。しかし妙子はだまつて立つて行き、その帽子を持つて來て、秋山の前においた。それが彼の今日かぶ

つて來た帽子である。
秋山は赤土の坂をのぼり、藤崎家の玄關に立つた。玄關はしんとしてゐた。少し早く來たらしい、と思ひながら、彼はベルを押した。玄關の扉の厚いガラスの向うに、白く妙子夫人の顏が浮いて、秋山だと知ると、につと笑つた。
あの笑ひかたは、まだ本物でない、と秋山は思つた。
「いらつしやいませ」と言つて、妙子は彼のオーヴァーと帽子を受けとり、客間の入口の帽子かけにかけた。そして少し考へるやうにした。
「ちよつといま、あちら、敷物やなんか片づけものしてゐますから」と妙子は、客間へ通せないことを言ひわけし、座敷を拔けて緣側へ彼を導いて行つた。
座敷の眞中に据ゑてある大テーブルをまはつて、妙子が障子を開けようと、彼の前に立ちどまつたとき、障子の下の方に照りつけてゐる光線の中で、妙子の白い耳たぶと白い首筋とが、秋山のすぐ目の前にあつた。そして、髮の匂ひか身體の匂ひか香水か分らない甘い匂ひが、秋山の身體を包んだ。それが秋山を壓迫した。
——この人のそばにゐるのは、おれには、いつも苦しい。おれはやつぱり、できるだけ心を素直に保つてゐる外に、この人の魅力に耐へる方法がない、と彼は考へた。
「しばらくここでお待ち下さいましね。間もなく皆さんがお集りになります」と妙子が言つて、廣い緣側の樂な寄りかかり椅子を秋山にすすめた。
「良子ちやんは元氣ですか?」と彼は中庭ごしに居間や臺所の方を目でさがした。

「ええ、今までそこにゐたんですけど……」と妙子が答へた。
秋山は子供好きであつた。彼はこの家へ來る毎に、藤崎三郎と妙子との間に生れた良子と遊んでゐたやうなものであつた。自分が良子に心を引かれるのは、妙子が好きだからなのかも知れない、と彼はいつも考へてゐた。
妙子は秋山の向ひ側に坐ると、ちょつとの間、秋山の目の中をのぞき込むやうにした。黑い妙子の目が、その顏の中で一杯に大きく開かれた。秋山はまぶしいやうな顏をし、なにか？　といふ表情でそれを受けとめた。
「あなたの、今日のお帽子は、形見に差しあげたあれね」と妙子が言つた。
「ええ、この冬は久しぶりでスキイに行かうと思つて、それで思ひ出して、こなひだ出して見たんです。僕が高等學校の一年で、はじめて黑田君にスキイを習つた時から彼はあれをかぶつてゐたのです。あなたが一緒に行つた頃も、いつもあれでしたね。」
「ええ」と妙子はうなづいて、少し痛いやうに笑つた。黑田は三郎の舊姓であつた。
その表情を見たとき、秋山は、いけない、と思つた。
——言ひ出すべきではなかつた。死者の一年目の命日の今日、あの帽子をかぶつて來たのも、いけなかつたかな。
しかし、妙子は痛いことだけれども、その話の續きをもつとして、といふ表情をした。
——今日は悲しみのための日だ、と秋山は考へた。悲しみは、この人の心の養ひなのだ。
秋山は意識して顏に笑を浮かべた。過ぎ去つた日は、訂正しがたいほど美しかつた、といふやう

に。
「あの帽子はよく、よく飛びましたね」と彼が言つた。
「おほほほ」と妙子は笑つた。そしてその目に涙が浮かんで來ると、妙子はしばらく、目をしばたいた。
「そして、あの帽子がふわつと飛ぶと、彼は、どんな急斜面でも、すぐその場でクリスチャニヤの急停止をする。その雪煙で身體が見えなくなるでせう。その雪煙がをさまる頃には、あの帽子を宙で受けとめてゐる、といふ風でしたね。」
妙子は、笑つてゐながら、はい、ほんとに、と言はうとした。しかしいま口を利けば、わつといふ號泣になるやうな怖れを感じて、懸命に聲の出るのをおさへた。そして妙子は袂の中のハンカチをさがした。その間彼女は、くつくつとむせぶやうに笑つてゐながら、目から涙をぽろぽろと膝の上にこぼした。あわてるとハンカチはなかなか探せなかつた。
——もうやめてくれればいいのに、と妙子は思つた。その時妙子は、やつとハンカチをさぐりあてた。すると妙子は、その續きをもつと聞きたい、と思つた。
秋山豐の方も、自分の口にした感傷に醉つてゐた。彼はいま、妙子夫人を泣かせたいのか、笑はせたいのか分らなかつたが、ただ亡くなつた人の思ひ出を語ることがこの人の情感をゆすぶるのが分つた。彼はこの人の心にふれてゐたいといふ衝動にかられて喋つた。
「あの妙技は、あなたが一緒に行つた時が特に多かつたと思ひますね。あなたが一緒の時は、どうも彼は、あの帽子を淺く、速力が出るとすぐふわつと頭から浮いてしまふやうに、かぶつてゐた氣

配が濃厚でした。あなたが一緒でないときは、あの帽子も、あまり飛びませんでしたよ。さういふ時、たいてい彼は陰氣な顏をして、あの帽子を目深にかぶつてゐましたし、吹雪の時なんか、その上から手拭でしつかりと頰かむりして、一體に不機嫌でした。」

妙子夫人はまだ笑つてゐた。しかし秋山の話が、いかにも話らしい形をとつて、少し不自然な感じになつた時、やつと彼女は笑ひの衝動からぬけ出した。

彼女は落ちつきをとり戻した。涙を拭いて、居ずまひを直し、

「まだお茶も差しあげませんでした」と言つて妙子は立つた。

秋山は、高等學校で、妙子夫人の亡夫であつた黑田三郎の二年下級にゐた。秋山は、その頃、スキイの映畫を見たのがきつかけで、運動部のスキイ部に入り、菅平にある學校のヒュッテに合宿して練習をした。そこで彼は、リーダアの黑田三郎と親しくなつた。三郎が大學に入つたのは、太平洋の戰爭が始まつた後で、その頃から黑田三郎は藤崎妙子と知り合ひになつた。スキイをかついで歩くのが白い眼で見られるやうになつたその頃でも、三郎は秋山やその友人の木島をさそひ、また妙子やその仲間の少女たちを誘つて、しばしば奥日光や菅平へ出かけた。しかしその二年後、三郎は召集されて戰爭に行き、平和になつた翌年南方から歸つて來て、また大學にもどつた。秋山は大學で最後の一年を黑田三郎と一緒に過ごした。その間に黑田三郎と藤崎妙子との交際は復活して、結婚することになつた。妙子は藤崎家の一人娘であつたので、黑田は藤崎家をついだのである。間もなく二人の間に娘の良子が生れた。

秋山豐は美學といふ、現實社會ですぐには役立ちさうもない科目を大學で專攻した。そんな學問

をしてゐては、人並みの勤め人になる見込みもなかつたので、秋山は三年の舊制大學を、新制なみに四年かけて學び、その間に映畫雜誌や二流新聞に映畫批評を書いて生活費を得る手段を講じた。大學を出てからも大學院に席をおいて、日本畫の樣式の變化と社會制度との關係をしらべるのを、研究題目にしてゐた。

三郎や妙子が彼に結婚をすすめると、秋山は笑つて、

「僕はね、僕の花嫁になる人に博士夫人といふ榮譽を與へたいんだ。そのために僕は、近いうち博士になるつもりだから、志のある方には、それまで待つてもらふんだな。さう簡單に博士夫人になれると思はれては困りますな」と言つた。

秋山は我が家のやうに藤崎家に出入し、三郎や妙子と一緒にハイキングに行つたり、スキイに出かけたりした。そして秋山は、自分の年齢が次第に必要とするやうになつた家庭の雰圍氣を藤崎家で味はつた。藤崎家には、長いこと各地の知事をした經歷のある六十歳をすぎた妙子の父がゐた。その藤崎老人は、時々釣に出かける外は、娘の結婚後に建てた離れの書齋に引つこもつて、政治史か何かの著述をしてゐるとのことで、めつたに母屋には顔を見せなかつた。三郎と妙子の間に良子が生れてからは、家庭が賑やかになつた。秋山豐は幼時に父を失つて、その顔も覺えてゐなかつた。そして伯父の家に母と二人寄食して育つた。高等學校を出た頃にその母をも失つた一人身の秋山にとつては、この友達の家庭が一番心の安まる場所であつた。間もなく、三郎は、年齢に似合はない萎縮腎といふ病氣になつた。その病氣は戰時中の無理な生活をしてゐた間に得たもので、軍隊の病院で一應をさまつてゐたものが再發したのであつた。癌の初期形成もあるといふことで、三郎は手

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

術を受けたが、減多に間違ひがないと言はれる手術の結果が思はしくなくつて、一年前の年の押しつまつた頃に病院で死んだのである。

秋山が、自分は妙子を愛してゐるのではないか、と本氣で考へるやうになつたのは、三郎の死ぬ半年ほど前からであつた。三郎が死ぬ年の夏のはじめのある日、彼はその病院へ見舞に行き、そこの廣い前庭のゆるやかな坂を登りながら、三郎が死ぬのはいつだらう、とほとんど心の痛みを覺えることなしに考へた。そして彼ははつと思つた。

——おれは、黑田三郎が死ぬことを豫想し、それを待つてゐるのではないか？　なぜだらう？

と彼は考へた。

そのとき、妙子の白い喉や、うるほひを持つた黑い目や、また紺のスラックスに赤い毛絲編みの帽子をかぶつて、奧日光のゲレンデの上の方に立ち、アルミニュームの白く光る輪のはまつたストックをあげて秋山を招いたりした時の彼女の姿などが、彼の目に浮かんだ。おれは、これまで、あの人の姿を見、あの人のあの顏を見ることを生き甲斐にして來たのではないか、と彼は思つた。また彼は、いつか妙子と二人きりでゐた時、妙子が「一體秋山さん、どんな人が好きなんです？」とまた結婚話を持ち出したのに對して、「私の博士夫人ですか？　それは、まあ、あなたのやうな人ですね」と言つたこと、そして言つてから自分でも驚いたこと、またその時、妙子が眞赤な顏をしたことを、思ひ出した。秋山が意識して女遊びをするやうになつたのは、その頃からであつた。彼は、藤崎家から遠ざかり、それまでアルバイトの程度にしてゐた映畫批評に力を入れ、試寫室や編輯室や喫茶店や酒場で日を送ることが多くなつた。收入もふえた。彼はその仕事の仲間と交際し、

だらしくなく酒を飲むことを覺え、またさういふ場所で女に近づくことも覺えた。
秋山は、それまで妙子と誘ひ合はせて病院へ見舞に行つてゐたが、この時から、それをやめた。そして手術のあと、急に衰への激しくなつた三郎に逢ふごとに、彼は、友人として三郎を痛ましく思ふよりも、妙子のために心を痛めるやうになつた。彼は、自分で自分の感じかたをさういふ風に作つてゐるやうな氣がしたが、さう思ふことで彼はどうにか心の平靜を保つことが出來た。そして三郎は死んだ。
秋山は三郎の死後、女にだらしない生き方をやめた。しかし、藤崎家に立ち寄るのが怖ろしいやうな氣持がして遠ざかつてゐた。しかし一周忌が近づいた頃、彼は妙子から手紙を受け取り、相談に呼ばれた。それは故人の追悼會のことだつた。あまり陰氣な會にしないで、レコード・コンサートを兼ねて、パートナアを連れて來ない輕い意味のダンスの催しにしよう、といふのが、秋山と、その相談の日に秋山が連れて行つたもとの仲間の木島の意見であつた。

2

ヴェランダの向うの角から、茶碗と菓子皿をのせた大きな盆を手に持つたオカツパの少女が、氣をつけて、そろそろと歩いて來た。
「おや、良子ちやん、お利口ちやんだね。おつと危い。小父さんがとつてあげる。」
秋山はさう言つて、吸ひさしの煙草を灰皿につきさし、手をのばして盆を受け取つた。
「えらいでしよ、あたし?」と言つて、良子は盆を秋山の手に渡すと、慣れてゐた形で秋山の膝に

乘つた。
「また良子ちやんは、小父ちやんと仲よしになつたんだね。」
「ええ、さうよ。」
「でも、こなひだは、もう少しで小父ちやんを忘れるところだつたでしよ?」
「ううん、あたし、ちやんと知つてたけど、でもね、」と言つて、秋山が取つてやつた菓子を一つ手に持つて、首をかしげ、「あたし、少し恥しかつたでしよ。」
「ああ、さうか。おぢいちやんは?」
「いま、あつちでお椅子やテーブルを片附けたりなんかしてるわ。」
「ああさうか。小父ちやんもお手傳ひするよ。忘れてゐた。」
秋山は良子の手をひいて、客間へ入つて見た。室の隅の、あまり目立たない壁面に、かなりの大きな藤崎三郎の寫眞をかけてあつた。藤崎老人が女中を相手に、カーペットをはいだ客間の飾りつけをしてゐた。
「これは大變ですな。お手傳ひすべきところを、少しいま、ぼんやりしてゐました。」
老人は煙草をくはへて、女中の持つて來た薄と山茶花をいけた花瓶の大きいのを、藤崎三郎の肖像のある室の隅の三角棚に置いた。
「やあ、秋山さん、よくいらして下さつた。まあ、黑田家の人たちは、遠いことでもあるし、今日は見えないやうだから、一つ追悼會らしくなく、あなたが指揮をして、なるべく明るくやつて下さい。過去は過去、將來は將來ぢや。この花は、あとで妙子が直すだらう。まあ、この室はこれでい

いわい。」

着物を着て、何か薄い布を襟に卷いた大柄で白髪の藤崎老人は、さう言つて、眞中をあけて壁ぎはに寄せて並べた椅子の一つに秋山を招き、灰のところが長くなつた煙草を、小さな卓の上の灰皿に落した。

ベルが鳴つて女中が出て行つた。良子がそのあとからついて行つた。二三人客が來たらしく、賑やかな話聲がし、それが座敷の中へ通つた氣配で、聲が遠くなつた。老人は氣がついたやうに、卓の上のマッチを持つて行つて、ガス・ストーヴに火をつけ、椅子をそちらにずらした。

「秋山さん、こちらへ寄つて下さい。」さう言つて老人は、白い大きな手を、ガス・ストーヴの方に差し出した。その手には年よりに特有の薄いアザのやうな斑點があちこちに浮いてゐた。老人は聲を落して、ひとりごとのやうに喋り出した。

「もう一年になる。早いものですなあ。あなたは古いお友達だから、今後もひとつ、何かと妙子の相談に乘つてやつて下さいませんか。あの當座は、あれがあまり悲しむものだから、私もどうなることかと思つたが、まあごらんの通り、病氣にもならず、段々と落ちついて居ます。しかし、どうも、一人しかない娘のあれが、このままでゐては、私にも本當の落ちつきといふものはありません。私は氣をつけて、なるべくあれを外へ出すやうにと、孫も私と一緒にゐるやうに慣らして居りますが、段々聞き分けがついて來ました。一つあれに、少し外へ出るやうな機會を考へてやつて頂けませんか。」

老人はさう言つてから、頭をあげて秋山の方を見た。その大柄な顏の、皺に疊まれた目に、さぐ

るやうな表情があるのを秋山は感じた。
三郎が生きてゐた頃は、老人は秋山と顔を合せても、ただ挨拶するだけで、こんな立ち入つた話をしたことがなかつた。
「さうですなあ。やつぱり妙子さんは、良子さんにかまけて、出そびれるんでせうねえ。」
秋山は、老人に調子を合せるやうに言つた。老人はしかし秋山の返事を聞いてゐないやうに、前の話に續けて言つた。
「再婚の話も、ぼつぼつあるにはあるんですが、あれはまだ、さういふ氣持になれんやうです。無理もない。それに、あれは弱さうでゐて強い所があつて、御存じのやうに、良子の父親の時も、あの人が戰地から戻つて來るまで、外の話には全く耳を藉しませんでした。押しつけでは駄目なんですわい。しかし、もうあれも三十歳ですからな。いま後家の氣持で頑なになつてしまつては、機會があつてもますます難かしくなるでせうからなあ。」
「いや、妙子さんのやうな美しい方は……」
秋山がさう言ひかけたとき、老人はちらと鋭い目で秋山の方を見、腕を組んで沈默した。そして、しばらくしてから、
「まあ秋山さん、これからもちよいちよい遊びに寄つてやつて下さい。」
「はあ、さうですね。近いうち僕は二三人仲間を作つて、久しぶりでスキイに出掛けるつもりですが、妙子さんをお誘ひして見ませうか？　でも良子さんが淋しがるでせうか？」
「いやいや、孫も段々聞き分けができるやうになりました。時々、私と寢るなどと言つて居ります

から、その點は大丈夫です。」
「まあ、お話して見ませうか。」
さう言つてから、秋山は、心がはずんで來た。彼は顏が少しのぼせるやうな氣がした。室も暖くなつて來てゐた。

3

十疊の日本座敷へ客が揃つたのは、電燈のつく頃であつた。男の客は秋山の外、木島昇と深澤一郎であつた。深澤は高等學校も大學も三郎と同期で、三郎と同じ經濟學部出身だが、役人になつてゐた。彼は、おとなしい、古風な感じのする細君と同伴で來てゐた。木島は高等學校では秋山と同級であつたが、黑田三郎と同鄕の靑森縣人で、今はある大新聞の運動部の記者である。彼は、少年の頃からスキイの選手だつた。大學生の時はオリンピックの選手になつてヨーロッパへ行つたことがある。もともと頑健な身體だが、職業上のことで酒を飲む機會が多いのか、この頃は太つて商事會社の重役のやうな恰好になつてゐたが、まだ獨身であつた。

女の客は妙子の友達の間庭夫人と、その妹の女子大學生の東山道子であつた。間庭夫人はやせぎすの顏に、菊の花を金絲で縫つた黑の少しいかめしい訪問着を着て、いかにも收入の多い實業家の妻といふつくりであつた。それが、彼女のはきはきした性格によく合つてゐた。東山道子は、ユニフォームのやうな紺サージのスーツに白い襟を浮かせ、陽に燒けた顏をつんと立てて、聰明な少女らしく、明るい目をしてゐた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com